

第7回「名取洋之助写真賞」受賞者決まる

公益社団法人日本写真家協会が新進写真家の発掘と活動を奨励するために、主としてドキュメンタリー分野で活躍している30歳までの写真家を対象とした第7回「名取洋之助写真賞」の選考審査会を、8月29日(月)JCII会議室で、鎌田慧(ルポライター)、大島洋(写真家)、田沼武能(公益社団法人日本写真家協会会長)の3氏によって行いました。

応募者はプロ写真家から大学在学中の学生までの31名、32作品。男性18人、女性13人。カラー17作品、モノクロ13作品、カラー・モノクロ混在2作品でした。

選考は30点の組写真のため審査会場の制約もあり受け付け順に10~11作品ずつ3回に分けて行い、第一次審査で18作品を選び、第二次審査で7作品が残りました。最終協議の結果、下記に決定しました。

●二次審査通過者

Keisuke kato 「Angeles city -zone of prostitution」 林 典子「Feeling～被災地からのサイン」

林 典子「硫酸に焼かれた人生～ナイラとセイダの物語」 山本康介「夫婦Observation」

山野雄樹「工場の少女達」 安田菜津紀「『残された子どもたち』HIVと共に生きる」

高橋智史「プレアビヒア—戦禍の世界遺産、名もなき兵士たちの肖像—」

●最終審査通過者

林 典子「硫酸に焼かれた人生～ナイラとセイダの物語」 山野雄樹「工場の少女達」



選考風景 平成23年8月29日 JCII会議室 撮影・小城崇史

◎第7回「名取洋之助写真賞」

林 典子「硫酸に焼かれた人生～ナイラとセイダの物語」(カラー、30点)

◎第7回「名取洋之助写真賞奨励賞」

山野雄樹「工場の少女達」(カラー、30点)

◎授 賞 式 平成23年12月7日(水)午後5時

アルカディア市ヶ谷「富士の間」

◎受賞作品展 富士フィルムフォトサロン東京

平成24年1月27日(金)～2月2日(木)

富士フィルムフォトサロン大阪

平成24年3月16日(金)～3月22日(木)

■ 第7回「名取洋之助写真賞」受賞者



林 典子 (はやし のりこ)

1983年神奈川県生まれ。27歳。2006年、2007年 大学在学中に西アフリカ、ガンビア共和国の新聞社「The Point Newspaper」で写真スタッフとして活動。DAYS JAPANフォトジャーナリスト学校、東京写真学園卒業。2010年 The Foreign Correspondents' Club of Thailand(タイ外国人記者クラブ)/On Asia Photojournalism Contest「人権部門」奨励賞受賞。2011年 DAYS国際フォトジャーナリズム大賞パブリック・プライズ受賞。清里フォトアートミュージアムに作品収蔵。現在フォトジャーナリストとして活動中、東京都在住。

作品内容

作者は2010年の夏、パキスタンに2ヵ月半滞在し、硫酸の被害に遭った二人の女性ら(ナイラとセイダ)と共に時間を過ごし、彼女達の生活をカメラで追った。二人は求婚や結婚生活のもつれから顔に硫酸をかけられ、硫酸被害者が暮らす施設で出会い、共に治療を重ねた。同世代の作者は、女性としての気品を失うことなく力強く生き抜く姿に感動し、二人の前向きに生きる姿を撮った優しくも力強い作品である。

受賞者の 受賞者名取洋之助写真賞を受賞することができ、とても光栄に思います。ナイラは13歳の時に、セイダは20歳という若さで、それぞれ求婚者と夫から顔に硫酸をかけられました。一生消えない傷を心に抱えながらも、撮影を受け入れてくれた2人の勇気と彼女たちの家族の理解がなければ、このストーリーを進めることも、硫酸被害そのものを写真で伝えることもできませんでした。これから2人の人生も記録していくと思っています。

■ 第7回「名取洋之助写真賞奨励賞」受賞者



山野雄樹 (やまの ゆうき)

1988年鹿児島県生まれ。22歳。2007年 鹿児島高等学校卒業、2011年 九州産業大学芸術学部写真学科卒業、2011年 九州産業大学大学院芸術研究科写真専攻博士前期課程入学、現在同大学院在学中、福岡県在住。

作品内容

鹿児島県枕崎市の鰯節「本枯節」を作る中国人工場労働者である若い女性達が真剣でひたむきに働く姿に着目し、現代日本の女性にはみられなくなった朝7時から夕方5時までの労働にたえる姿を撮った。そこで共に働く職人の茶屋さんの言葉にある通り、「中国人実習生がいなければ工場自体が回らない。本当にこの子達がいないと仕事ができない…」という言葉に象徴されている、日本の零細企業の姿を見た優作である。

受賞者の 受賞賞に選んでいただき本当にありがとうございます。受賞の一報を受け工場で働く皆さんに伝えたいと思いました。現在枕崎では中国からの実習生が鰯節を作っています。古くからの手法による鰯節の製造を支えているのが彼女らです。職人の茶屋さんは、師匠でもあり、親代わりでもあります。現場の張りつめた空気は日本古来の技術と中国から来ている彼女らが作り出す今の日本の風景だと思います。今後も、鹿児島の表情を記録し続けられたらと思います。

審査を終えて

第7回「名取洋之助写真賞」講評

第7回「名取洋之助写真賞」の選考は去る8月29日におこなわれた。今年は3月11日に東日本で大震災、大津波の襲来、原発の爆発事故と世界的なニュースが起り、世界から報道写真家が来日し取材して帰国している。

もちろん日本の写真家もたくさん取材に入っている。みなスポットニュースとしての取材でフィーチャー写真として登場するのではなかろうか。

毎年思うのだが、この写真賞に応募する写真家は、プロを目指すか、すでにプロとして活躍を始めている若者だ。応募作品のレベルは高く、その作品の力量は僅差である。接戦の中で賞を決めなければならない。個々の作品には作者の情熱が漲っている。選考委員の緊張も限界に達する。テーマの内容、撮影者の理解度、表現力などが討議され最終審査となる。その結果、名取洋之助写真賞には林典子さんの「硫酸に焼かれた人生～ナイラとセイダの物語」が、奨励賞には山野雄樹氏の「工場の少女達」が選ばれた。

パキスタンでは求婚を断られた報復として女性に硫酸を浴びせる事件が後を絶たない。また、家庭内暴力の結果、同じ事件が起り、年間に150～300件も起きているという。林典子さんはパキスタンに2ヵ月以上滞在し、その被害者2人と対話を共にして彼女たちの生活を取材し、人間としての尊厳、女性としての気品を失うことなく力強く生きる、また、心の傷を抱きながら前向きに生きる姿をコクメイにドキュメントしている。奨励賞の山野雄樹氏「工場の少女達」は、鰐工場で働きながら技術実習をする中国からきた少女たちと、工場主であり鰐工場の職人である茶屋久徳氏との交流物語である。親代わりになり優しく接し、厳しく技術指導する茶屋さん。少女たちは過酷な労働にたえ黙々と「日本の味」本枯節を作る技術を学ぶ真摯な姿が写し出されている。

第7回「名取洋之助写真賞」選評

若いひとたちが、いまどんなテーマに向き合っているのか、それを知るのは刺激的である。

活字の世界でのドキュメンタリーの登竜門はすぐなく、新人のデビューは難しくなっている。発表の場もまたすくない。名取賞にむかってくる無名のひとたちの真剣さは、つぎの時代の報道写真を担うたしかな存在を感じさせて羨ましくもある。活字の世界での取材と発表は、いまや企業内ジャーナリストが中心になってきたからである。

圧倒的な存在感を示した林典子さんの「硫酸に焼かれた人生～ナイラとセイダの物語」は、テーマの鋭さ表現力の豊かさ、対象との関わり方、そのどこからみても賞たるにふさわしく、審査員の満票だった。不満はすでに新人の領域を超えていることだ。

今年は3・11被災地のあらたな視点と表現に期待していたので、林さん

田沼武能



のもう一点、「Feeling～被災地からのサイン」を推す道もあったが、パキスタンの女性の困難さとそれを乗り越えようとする力強さのまえでは、余計な算段というものだった。大型新人の誕生は、大いなる喜びである。

林さんの登場で無念な結果になったのが、安田菜津紀さんの「『残された子どもたち』HIVと共に生きる」だった。撮影者の人柄のやさしさと訴求力の強さがよくあらわされていて、最後まで捨てがたい作品だった。次のチャンスにかけてほしい。

奨励賞・山野雄樹さんの「工場の少女達」は、中国人実習生が主人公なのだが、その労働の過酷さを超えて明るさと愛おしさを感じさせるのは、いっしょに働くひとたちが、大事にしているのがわかるからだ。そのほのぼのとした人間関係が映しだされている。山本康介さんの「夫婦Observation」、黒川宗孝さんの「ハッ場のうたかた」、中山寛樹さんの「モンゴルに生きる」も印象的だった。

第7回「名取洋之助写真賞」選考総評

大島 洋

応募作品の半数以上が第二次審査に残った。レベルの高い、そして拮抗する力を示した作品がいかに多かったか、その裏づけのひとつとして察していくだけるかと思う。殊に二作品に絞らなければならぬ最終選考では長時間の論議をつくし、各委員それぞれに苦しい決断をしなければならなかった。その結果、名取洋之助写真賞は林典子さんの「硫酸に焼かれた人生～ナイラとセイダの物語」に、奨励賞は山野雄樹さんの「工場の少女達」に決まった。



「硫酸に焼かれた人生～ナイラとセイダの物語」はタイトルが示すように、家庭内暴力や求婚を断られたなどの理由で女性の顔に硫酸を浴びせかける事件が頻発するパキスタンに取材した渾身の作品である。ナイラとセイダという心身に深い傷を負ってなお、尊厳を失うことなく強く生きる若い2人の女性がこの「物語」の主人公であるが、林さんは同世代の彼女たちと対話を共にして長期間の取材にあたっている。これまでにも幾つかのメディアで発表されてはいるものの、新たに選択構成された30枚の写真は心打つものがある。

「工場の少女達」は、鹿児島県の枕崎で伝統的技術を継承して「本枯節」と呼ばれる鰐節を製造する職人や、その現況を撮り続けた骨太の作品である。歴史のあるこの鰐工場でも何年か前から、実習という名目で働きに来る中国の若い女性たちに労働力の多くを頼っている。厳しい労働環境の中でひたむきに働く彼女たちに視点を置くことで、伝統も継続も不变のままでありえないという、日本の現在の姿をも伝えている。

最終選考に残ったなかで、山本康介さんの「夫婦Observation」は、極めて私的な関心と動機を基点に普遍的なテーマに挑んでいて、写真の魅力とともに新しいドキュメンタリーの可能性を感じさせたし、安田菜津紀さんの「『残された子どもたち』HIVと共に生きる」は、撮影取材という関係を超えてHIVを撮り続けている真摯な姿勢と、気負いのない眼差しに惹かれた。

鎌田 慧



「名取洋之助写真賞」について

公益社団法人日本写真家協会(JPS)は、社会に貢献する事業として「JPS展」や「日本写真家協会賞」の表彰並びに顕彰を行っています。2005年からは「名取洋之助写真賞」を創設しました。

名取氏は、1950年の協会設立初期から写真企画展の実施で協力。また、写真著作権の重要性を進言されるなど、さまざまな面で助言を戴いています。没後私どもの協会に、名取洋之助が関わった日本工房、サンニュース時代の写真原板の一部を寄贈されたものから生じた収益を、「名取洋之助写真賞」の基金として、主として若いフォトジャーナリストの育成に役立つことを望み、この写真賞を創設しました。

●名取洋之助(1910～62年) ドイツに留学していた名取洋之助は23歳の若さで、1930年代ヨーロッパで勃興していたフォト・ルポルタージュをわが国に導入し、木村伊兵衛らと33年「日本工房」を興す。その後、土門拳、藤本四八、亀倉雄策らと「NIPPON」を創刊し、フォト・ジャーナリズムを確立する。戦後は47年に『週刊サン・ニュース』を創刊。

50年に『岩波写真文庫』を創るなど、写真家であると同時にすぐれた企画、編集者でもありました。

■ 第7回「名取洋之助写真賞」受賞作品

林 典子 「硫酸に焼かれた人生～ナイラとセイダの物語」（カラー、30点）



■ 第7回「名取洋之助写真賞奨励賞」受賞作品

山野雄樹 「工場の少女達」（カラー、30点）



